
コーヒーを一杯。

彩月空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーヒーを一杯。

【Nコード】

N6866G

【作者名】

彩月空

【あらすじ】

恥ずかしがり屋で、変な能力をもった女の子。彼女を支える、見た目は綺麗でちょっとずるがしこい女の子。おまけに少しおバカで至って普通な男の子。そんな彼女たちがおくる小さな物語集。いざ、開店。

開店前（前書き）

当小説は連載小説扱いですが、1話完結形式をとっていきたいと考えています。

ですので、1話ごとにまとめて更新する形をとります。

よって、1話1話の更新間隔がかなり開く場合がございます。その辺りはご了承ください。

尚、最終話は既に書き終えております。話のネタがなくなったら、それをあげておしまいということにします。

最終話目指して、1話完結ながらゆっくりとしかし確実に進んでいく物語をお楽しみください。

それでは。

開店前

人生には、いくつもの選択肢がある。

どちらを選ぶかで、人生が大きく変わるかもしれない。

よりよい未来に向けて、我々は慎重に選択しなければならない。

そんな分岐点で手を差し伸べてくれる人がいる。

差手高校。公認同好会。

「cafe select」

そこにいるのは、恥ずかしがり屋の女の子と落ち着きのある女の子。

それからおまけに平凡な男の子……。

恥ずかしがり屋の女の子は、この同好会の会長。

……いえ、店長。

彼女はちよっぴり特殊な能力をもっている。

その力を使って、お客にとってベターな選択肢を与えるのが、この同好会の趣旨である。

さて、

あなたの進むべき道は、どちらですか。

ケース1 『僕は彼女に告白すべきか、否か(その1)』

(開店)

「あ……」

そこは小さな喫茶店。

大好きな彼がコーヒーを淹れている喫茶店。

彼女は遠くからそれを見つめ、嘆息する。

声をかけることなんてできない。

自分がここに通い詰めていることも秘密だ。

だって、もしもそんなことがばれたら恥ずかしくて死んでしまうもの。

「……ふふ」

彼が淹れてくれたコーヒーを飲みながら幸せに打ちひしがれる、ひとりの女の子。

それが、この物語の主人公。

~~~~~

放課後。

部活に向かう生徒や、下校する生徒の喧騒にまみれて1人の男子生徒がとある教室の前に立っていた。

教室、と言ってもその外観だけで判断すれば、それは喫茶店にしか見えない。

見た目だけでなく、中も喫茶店のようになっていたのだが、それは入ってみればすぐに分かる。

では、なぜこの差手高校に、そのような場所があるのか。

それは単に理事長の思いつきといえればそれまでなのだが、実はこの喫茶店には“秘密”がある。

この喫茶店、名を「c a f e s e l e c t」と言った。

元々はただのお茶飲み同好会だったのだが、とある事情により同好会でありながらこのような待遇を受けることになった。

その事情は1人の女子生徒に集約される。

彼女の名前は二ツ橋彩咲未。

通常人にはありえない特殊な能力を持つ彼女が理事長の目に留まり、めでたくこうした喫茶店を手に入れることができたのだ。

だが残念なことに、ただのお茶飲み同好会でなくなったことでメンバーは激減。

今では、たった2人という侘しい状況に陥っている。

それもそのはずで、この同好会の現在の趣旨は「悩める人に、ベタな選択をしてもらおう」というように文字面だけ読めば全くもって意味不明なものなのである。

それに加えて、この二ツ橋と言う生徒。

かなり扱いに難しい人物のようで、彼女と共に過ごすには、それなりの覚悟がいるというのも、メンバーが集まらない理由であったりする。

そもそも特に人数が必要なわけではないし、これは理事長により設立されたといっても過言ではないので同好会自体が無くなる危険性もない。

そういったことから、残った2人も別段メンバーを集めようとすらしていないのだ。

さて、いろいろと話が飛んだが、ここで冒頭に戻る。

「cafe select」の前に立った男子生徒は、至って普通



の男子生徒だった。

いわゆる平凡というやつだ。

しかし彼はある決意をもってここに立っている。

それはつまり、彼が悩める少年であることを意味しており、さらに言えば、彼がベターな選択肢を求めているということでもある。

彼は意を決して扉を開いた。

すると、喫茶店特有のコーヒーの香りが

「うん……。やはり私には不向きなようですね」

「えー……。でもお……」

「缶コーヒーで我慢してください」

「うん……」

立ち込めすぎるほどに立ち込めていた。

何度ドリップしたのだろうか、部屋中にドリップし終わったコーヒーの残骸たちが並んでいる。

今まさにコーヒを淹れ終えたのであろう女性徒は、制服をきちんと着こなし背筋の伸びた綺麗な人だった。

手に持ったケトルが、少しだけ愛嬌を与える。

柔らかそうなソファに寝転がって、悲しそうに俯いているのは先の女生徒とは違い可愛らしい女の子であった。

やや短めのスカートを除けば、こちらもだらしなさはなく、制服を着こなしているといえる。

2人は、いきなりの来客に驚いた様子だったが、入ってきた男子生徒の顔を見て完全なまでの作り物の笑顔を貼り付けた。

「いらっしゃいませ」「いりゃ……」

噛んだのは、後者の女の子である。

彼女は顔を真っ赤にすると、ささっと棚の隅に隠れた。

ケトルを持った女生徒は呆れたようにため息をつくとき、  
“お客様”  
に席をすすめた。

「どござ」

「ど、どござ……」

なんだか、おかしいところだなあ、と思いながらも男子生徒は席につく。

隅に隠れた女の子がこっそり様子を窺っているのだが、それには気づかないふりをして、口を開く。

「あの……」

「ご注文はなんでしょう？」

「……はい？」

「ご依頼、ですよね？」

「あ、はい」

「あ、申し遅れました。私、副田<sup>そえだまなな</sup>愛花と言います。クラスは2 - Bです」

愛花と名乗ったケトル少女は、丁寧に頭を下げた。

「えっと、僕は香坂<sup>こうさかゆづい</sup>優一です。クラスは2 - Aです」

「香坂……。ああ、あなたが」

「え？」

「いえ。こちらの話です」

「は、はあ……」

「それで、ご注文なんです……。少々お待ちを」

そう言っつて愛花は隠れている女の子の元に向かった。

一言、三言会話を交わしてから、引っぱり出されるようにして出てきた女の子は愛花の背に隠れながら、自己紹介をした。

「わ、私は、えっと……。ふ、二ツ橋、あ、あ、彩咲未、です」

「はい、知ってますけど。同じクラスですし……」

「あ……」

彩咲未と名乗った少女は、その返答に耳まで顔を赤くし、愛花の背に完全に隠れた。

愛花はため息をつくと首を横に振って、そのまま彩咲未を引きずるようにして冷蔵庫に向かい、中から缶コーヒーを取り出した。

「とりあえず、これを飲みなさい。あさみ」

「え、でも……」

「あの人はお客様ですから。個人的な事情はひとまずおあずけです」

「う……」

彩咲未はしぶしぶと言った感じで、ごくりと缶コーヒーを飲んだ。

「ぐくり、ぐくり……」。

そして、全てを飲みきった後、彼女はこれまでのしおらしい言動が嘘であるかのような言葉を発した。

「まっずいな、これ」

その変貌振りには優一も驚きを隠せなかった。

同じクラスと言うことで、ある程度彩咲未のことは知っていた。

物静かな大人しい子だ。

それ以上でも、それ以下でもない。

cafe selectでは傍若無人で同好会メンバーを全て辞めさせた“彩咲未様”として知られているらしいが、そんなものはでまかせだと思っていた。

しかし、今日の前にいる女の子はどつだ。

全く噂どおりの彩咲未様ではないか。

「で、なんだって？」

「お客様です」

「そっか」

彩咲未はつかつかと優一の前に歩いていくと、じっとその顔を見つめた。

あまりに凝視されたので、思わず優一が顔を背けたほどだ。

「……なんだ。客って優一か」

「え？ あ、はい」

「こんなところに何の用だよ」

「えーっと、相談したいことがあります」

「そっか」

「はい……」

助けを求める視線を向けられた愛花は2人の座るテーブルの横に立つと、優一に説明を始めた。

「こちら、うちの店長、二ツ橋彩咲未です。彼女は変わった能力を持っています。それはご存知の通り、未来を視るという能力です。しかし、実はそれには限界があります。それは何か」

勿体つけたように間を置いた彼女は、彩咲未を示して続ける。

「詳しい理由は不明ですが、彼女はコーヒー摂取時のみ、その能力を扱うことができます。要するに、魔法使いには杖が必要というように、彼女が能力を使うにはコーヒーが必要ということです。……おまけとして、性格も豹変します」

「へ、へえ……」

あまりの変貌振りに絶句する優一だが、そんなことはお構いなしに彩咲未が口を挟む。

「そんなくだらない解説はどうでも良いんだよ。とにかく要件を早く言ってくれ。コーヒー摂取時つてのは厄介な制限だな。効力を維持する時間が限られてんだ。特に缶コーヒーじゃあな。力が……」

そこで急に言葉が途切れた。

優一に唾が飛ばんくらい距離まで顔を近づけていた彩咲未の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「ち、力が、す、すぐにつ　　！」

そして、そのまま意識を失った。

ケース1 『僕は彼女に告白すべきか、否か(その2)』

「奇妙なこともあるんですね」

「はい。全くです」

彩咲未が気絶している間、優一と愛花は淡々と会話を進めていた。

「それにしても、コーヒーですかあ……」

ソファに転がっている彩咲未に視線を向けて、優一は目を細める。

そんな彼を見て、さも自然な流れで愛花はこう切り出した。

「そういえば、あなたは喫茶KOSAKAの？」

「そうです。ご存知なんですね」

「はい。それはもう」

喫茶KOSAKAとは、その名の通り香坂優一の実家である。

彼の父である香坂匠を店主とした喫茶店で、一部には熱狂的なファンもいるらしい。

「そうですね。常連さんばかりで若い人はあまり来ない店なので、同級生にも知られていないものだ……」

「いえ。とても美味しいと評判ですよ」



「そう言ってもらえると嬉しいです」

「……あの」

「はい」

「敬語でなくて結構ですよ。同級生なんですから」

「え？ でも、副田さんも」

「私は、これが仕事ですから」

愛花はそう言ってふふつと笑うと、まだ目を覚まさない彩咲未を横目に、ぱんと手をたたいた。

「あの子もまだ起きませんし、少し頼まれてくださいますか？」

「あ、はい……」

むっとした瞳で睨まれた優一は、何かに気づいたのか慌てて訂正する。

「……うん。良いよ」

~~~~~

「上手ですね」

「一応、バイトという名目で手伝いをしているので」

「なるほど……」

彩咲未が目覚めたとき、部屋中に広がるコーヒーの香りに気がついた。

どこかで嗅いだ……否、嗅ぐために通っている、あの場所の香り。

「うあっ！」

飛び上がった彩咲未は寝ぼけ眼で辺りを見渡す。

ここは見慣れた喫茶店。

同好会の活動中だ。

コーヒーを淹れたままの姿勢で固まった優一を見て、我に返った彩咲未は気を失う前のことを思い出して再び、赤面。

「おはようございます。早速ですが、こちらを一杯」

「ふえ！？」

「役目を果たしていただかないと」

「……………あ、うん」

愛花から大切そうにマグカップを受け取ると、一口。

口の中に広がる、この味は 。

「美味しい」

言わなくても分かるだろうが、彼女の舌が導き出したのは、この味が自分の大好きな味であるということだった。

そもそも、この場には彩咲未が購入したコーヒー豆が立ち並んでいる。

中でも数が多いのが、これだ。

喫茶KOSAKAのオリジナルブレンド。

彩咲未は、これが大のお気に入り、山のように買って帰るお得意様なのだ。

残念ながら、優一はそれを知らない。

なぜなら、彼女は彼に気づかれないように、こっそりとコーヒーを飲みに行くからだ。

その理由は……一応、まだ伏せておく。

伏せる必要性など皆無だろうか。

「優一が淹れたのか？」

「え？ あ、うん」

彩咲末の変貌振りにまだなれないのか、ややおどおどした風に答える優一。

「まあ、良いや。で、悩み事だったな。とにかく言ってみる」

「……え、っと」

「どっした？」

「あの、ちょっと言いにくいんだけど、いいかな？」

「あ？ じれったいな。男ならばつと言えって」

「そうだね。分かった」

優一は自らドリップしたコーヒーを一口すすする。

父には劣るが、それでも客に出して恥ずかしくない出来映えだと思っ。

飲みなれた味に少しだけ心が落ち着く。

「実は、僕……」

「んん？」

美味そうにコーヒーをすする彩咲未の顔から少しだけ視線を外し、
優一は言った。

「好きな人が、いるんだけど」

危うく吹き出すところだった。

彩咲未はなんとか冷静さを保つために、コーヒーを勢いよく飲み込
んだ。

「お、おお。それ、で？」

「告白したいと思っっているんだけど、それで……」

「成功するかどうか、ですか？」

口を挟んだのは愛花だった。

優一は彼女の言葉に首を横に振った。

「いや、成功するかどうかは自分で確かめたいから良いんだ。なんだか卑怯な気もするし」

「では、いったいどういったご用件で？」

「告白する相手は、君野望々乃^{きみのもの}。僕の幼馴染^{幼馴染}なんだけど」

「君野望々乃、ですか」

「う、うん」

「それで、告白して振られた後、今までどおりに接することができると不安なんだ」

「振られること前提なんですか？」

「うん、なんていうか……望々乃には好きな人がいるらしいので「なるほど」

優一は恥ずかしそうに頬をかきながら言葉を続ける。

「でも、想いだけは伝えておきたいんだ。それで、そういうことがあった後って不自然になりがちだと思うんだよね。元の関係に戻ったように戻っていない。なんだか小さな壁ができた感じっていうのかな。特に僕はそういうのがすぐ態度に出るタイプみたいだから不安でさ。そういうわけで、振られた後、元の幼馴染という関係にきちんと戻れるなら、って思ってね。女々しい考え方かもしれないけど、彼女と微妙な関係になっちゃうのは嫌なんだよね。想いは伝え

たいけど、疎遠にはなりたくない。自分でも呆れるくらい卑怯だと思っけど、そういうことかな」

「分かりました。では、店長」

「ああ？」

マグカップを片手に、不機嫌そうな彩咲未は愛花を睨みつけるようにして返事をする。

「視てあげてください」

「何を？」

「話を聞いていらっしやらなかったのですか」

「聞いてた」

「では、お願いします」

「……………ああ」

果たして、彩咲未の能力が発揮される。

と言っても、別段何か変わったことをするわけではない。

彩咲未はただ目を閉じ、深く、深く息を吸い込む。

そして、ゆっくりと長く吐き出す。

その後、ぴたりと時間が止まったかのように静かになる。

このとき、彩咲未の瞼の裏にはひとつの映像が流れる。

今回は、優一が君野望々乃に告白して、その後のことだ。

彼女の能力は、いわゆる予知である。

未来が見えるのだ。

コーヒーを飲んだ後の覚醒時に限定されるが、彼女はこの能力ひとつで、理事長を引き入れ同好会を存続させている。

同好会「cafe select」とは、何か困ったことが起こったときに手を差し伸べる場所なのである。

すなわち、目の前に2本の橋がかかっており、どちらかを選んで前に進まなければならないという状況に陥っているとき、彼女はその力を使って、より彩り豊かな未来が咲き誇っている方へと導く手助けをしているのだ。

「……………だっ！」

変な叫び声の後、彩咲未は瞳を開けた。

「え、えーつとだな」

ややしどろもどろなのは、どうしたことか。

彩咲未は視線をあちこちに飛ばして、言葉を漏らした。

「どうやら、元の関係に戻れそうはないな。さっき自分で言っていたように、お前は微妙な心境の変化から春菜とかいう女に対してちよつとした壁を作ってしまう。それがだんだん大きくなって、感じて感。結果的にあつちも傷つく結果になりそうだ。……だから、悪い事は言わねえ。告白なんて……」

「そっか」

彩咲未の言葉を最後まで聞かずに優一は頷いた。

そして、立ち上がると頭を下げる。

「ありがとう。二ツ橋さん。つまり、そうならないように気をつければ良いわけだね」

「ええ？」

「予知って100%じゃないんでしょ？」

「ま、そりゃそーだが」

「だったら話は早い。何もしなければそうなるなら、それを換えれば良いだけだ。知っているのと知らないのでは雲泥の差だからね。ありがとう」

満面の笑みを浮べる優一に対して、一方の彩咲未は顔をゆがめる。

そんな2人の顔を見比べた後、愛花が口を開いた。

「本来なら報酬として、相談内容に見合った本数だけ缶コーヒーを要求するのですが、あなたには、また後日、別の形で請求させていただきます」

「え？」

「あなたには、美味しいコーヒーを淹れる技術があるようですので」

「なるほど……。分かった。それじゃ、また連絡を」

「はい」

「それじゃあ、また」

そう言って、優一が出て行った後、すぐさま彩咲未は手に持っていたマグカップを壁に投げつけた。

そして、大きく舌打ち。

「それで、どこからが嘘なんですか？」

「う、嘘なんてついてねえよ」

「バレバレです。誰を相手にしていると思っっているんですか」

「……ついて、ねえよ」

「そうですね。元に戻った後、泣きついてても知りませんからね」

「……………」

長い沈黙。

「それに、あの方のどこが良いのか。私にはさっぱり分かりません。ただの臆病者じゃないですか」

「……………」

再び。

「それでは、私は割れたマグカップを片付けますので」

愛花はそそくさと掃除を始め、残された彩咲未はじっと考え込む。

言つべきか言わざるべきか。

まさに、今、自らが二択の境地である。

しかし、考える時間はほんのわずかだった。なぜなら。

「ま、ま、愛花ちゃん」

効力が切れたからだ。

「元に戻ったんですか」

「どどどどどしししよう。私、私……」

「それで、どこからが嘘なんですか」

「……ぶ」

「はっ？」

「……全部」

ケース1 『僕は彼女に告白すべきか、否か(その3)』

「つまり、香坂の告白は成功するということですね」

「……………うん」

「はあ……………」

「だ、だって」

「分かっています」

愛花は額に手を当てて考え込む。

さて、隠す必要はなかったが、ここでネタ晴らし。

何を隠そう、当同好会のトップ。

「cafe select」の店長である二ツ橋彩咲未は同じクラス
の同級生、香坂優一に絶賛片思い中なのである。

想い人からの恋の相談。

まさに葛藤状態というやつである。

「……………予知は100%じゃない、ですか」

「え?」

「いえ。彼の言葉です」

愛花は急いで優一が淹れた残りのコーヒーを新しいマグカップに注いだ。

そして、それを彩咲未に手渡して言う。

「とりあえず、行ってきてください」

「ど、どこへ？」

「彼が告白を終えたらおしまいです。あなたの視た予知が彼の告白の成功という未来なら、それを変えれば問題ありません」

「で、でも……」

「理性では間違っていると思っても、本能が正しいというのは、それは正しいんです」

愛花の意味不明な論理に後押しされ、彩咲未はマグカップを手に廊下に放り出された。

今にも泣き出しそうな顔で彼女は走り出す。

とにかくは謝罪を。そして？

~~~~~

彩咲未が優一を見つけたのは、今まさに告白せんとする瞬間であった。

君野望々乃と対峙し、ほんのりと頬を染める優一。

彩咲未は持ってきたコーヒーをぐくりと飲み干すと、颯爽とその場に躍り出た。

……告白を邪魔された優一にとっては、疫病神以外の何者でもないのだが。

「ちよつと、待ったあああ！」

あらん限りの声を張り出した彩咲未は呆気に取られる望々乃には目もくれずに優一をかっさらっていった。

その華奢な身体にそんな力があるとは思えないが、これがいわゆる火事場の馬鹿力なのか、はたまたコーヒーの作用でパワーアップまでするのかは分からない。

とにもかくにも、彩咲未は優一を抱えて、その場から立ち去ったのである。

残された春菜はぼかんと口を開けたまま、しばらくその場から動けない。

自らの想い人である優一から呼び出され、もしかしたら、と胸をときめかせてやってきた乙女は予想外の事態についていけないのだ。

がくと腰から崩れ落ちた彼女は、優一をさらっていった小さな女の子の姿を思い出し、はたしてあんな子がこの学校にいたのだろうか  
と首をかしげたのだった。

~~~~~

「あ、あ、あの、二ツ橋、さんっ!」

「うるさい、黙れ。ちょっと黙れ」

「いせ、でも」

「...」

自分よりも小さな女の子に引きずられる形で廊下を駆け巡った優一は春菜と同様突然の出来事に理解が追いつかない。

とりあえず告白を邪魔されたのは分かる。

……邪魔？

彼は無抵抗のまま彼女に連れて行かれたのだった。

~~~~~

「……………」

この長い沈黙は彩咲未のもの。

優一の告白を回避させることには成功したのだが、この後いつたいどうすればよいのか。

そして自分がしてしまったことに対する後悔も含めて、彼にどんな顔を向ければ良いのかがわからないのだ。

「えっと、ニツ橋、さん？」

そんな空気を察したのか、優一が声をかける。

びくりと身体を震わせた彩咲未はできうる限り強気に振り向きつつと

して、

「……………ひっ」

いつもの、大人しい彩咲未さんに戻った。

あわあわという擬音が似合いそうなくらい慌てふためいた彼女は涙目になる。

そんな彼女を見ながら、優一はため息混じりに言った。

「心配して来てくれたってことだね」

「……………え？」

「僕が振られる前に、止めてくれたってことだね。ありがとう」

「……………」

「違うの？」

何故か、彩咲未の予想斜め上の反応を見せる優一に彼女は思わず首を縦に振った。

実際は、ただ単に告白を邪魔しただけなのだが……………。

「そっか。分かった。告白するのは、もう少し待つことにするよ」

「えっ？」

「予知が変わったところ……望々乃に受け入れられるという自信が  
いたころ、また告白するよ。そうすれば、二ツ橋さんにも心配かけ  
ずにすむし」

「……あ……………うん」

彩咲未は返す言葉もなくとりあえず頷いた。

だが、すぐさま思い直す。

これではいけない。

彼の勘違いを解かなければならない。

だから、真実を伝えなくては。

「ごめん、なさい」

「え？ どうして謝るの？」

「えっと、告白の……………」

「うん。だから、良いよ」

「……………あ」

「うん？」

「ごめんなさい！ 本当はあなたの告白は……………」

そこまで言って、彼女は固まった。

本当は彼の告白は成功する。

それを知って尚、自分は彼の邪魔をした。

ということは……？

もしかして、暗に自分の気持ちを彼に知られてしまう結果になってしまうのではなからうか。

そんな思いが彼女の内に巻き起こる。

「告白は？」

しかし、これ以上、偽るわけにはいかない。

全ては自分がまいた種なのだ。

それを捨つのもまた自分の役目である。

「……成功するはずなの」

「え？」

「だから、あなたの告白は」

「ありがとう」

「……………ふえ？」

突然、感謝の言葉を告げられ戸惑う彩咲未に、優一はさらに追い討ちをかける一言を。

「慰めてくれているんだよね……。本当にありがとう。でも大丈夫だから」

かくして、天然なのか、それともただの間抜けなのか、優一の思考回路のおかげで、2人のすれ違いは埋まらず、香坂優一の告白事件はひっそりとその幕を下ろしたのである。

ケース1 『僕は彼女に告白すべきか、否か(その4)』

「この場合、あさみがバカなんでしょうか。それとも、香坂がバカなんでしょうか」

「……………そんなの、分かんない」

「はあ」

「どございませう!?!」

「どちらにせよ、真実を告げたところで信じてもらえない以上、私たちが干渉しても仕方がないと言えます」

「で、でも」

「良かったじゃないですか。告白が不発に終わって。あさみとしては願ったり叶ったりでしょう」

「うっ……」

翌日の放課後、cafe selectではいつもの2人がだらだらと過ごしていた。

だらだらと言っても、ソファに寝転がっているのは彩咲未だけで、愛花の方は背筋をぴんと伸ばして椅子に腰掛けている。

ひとつひとつの動作が魅入ってしまうほどに美しい。

「君野望々乃へのフォローは入れたのですか？」

「……」

「分かりました。そちらは私が何とかしましょう」

「お願い、します」

「いえ」

淡々と告げる愛花は早速立ち上がると、廊下へ出ようと手をかける。

……が、その前に扉が開いて誰かが中に入ってきた。

「あら」

「あ、どうも」

その人は、香坂優一。

彼は店内へと足を運ぶと、早速調理場へと向かった。

荷物の中からコーヒー豆を取り出すと、それをいそいそと挽き始める。

「何をされているんですか？」

「昨日の報酬です」

「ああ、なるほど」

「それから……」

そう言つて優一は視線を動かす。

入ってきたときには確かにいたはずの彩咲未の姿は既にソファにはない。

彼はしばらく視線を彷徨させた後、隅に隠れる彩咲未の髪を見つけ、小さく微笑んだ。

「いろいろとお世話になったので」

「そうですね……」

頭の中で、まざまざと計算を終えた愛花はぼんと手を叩いてひとつの提案をする。

「それでは、そのお世話になった分、お礼などしていただけないでしょうか」

「お礼、ですか」

「はい。知つての通り、うちの店長はコーヒーがないと能力が使えません。しかも、缶コーヒーだと威力・持続時間共に弱い」

「確かに」

「やはり、美味しい、しかも丁寧に淹れられたコーヒーが一番良い」



「ふんふん」

「というわけで、香坂。あなたもうちの同好会に入りませんか？」

「……………なるほど」

豆を挽く手を止めた優一は、小さく、ん、という声を漏らして、愛花に視線を向ける。

「でも、僕で良いのかな」

「はい。あなたの家には、よくあさみがうがっておりますので。きつと“お気に入り”なのだと思います」

「そうなの？」

「はい。常連のはずです」

「へえ……………それは知らなかったな」

優一は薄く微笑んで、隠れ切れていない髪の毛に向かって声をかける。

「注文は？」

髪の毛が答える。

「……………コ、コーヒーを一杯」

「かしこまりました。少々お待ちを」

cafe select。

そこは、誰かの力になるお店。

今日も、その店内にはコーヒーの香りが立ち込める。

店長とウェイトレスの2人だけだった喫茶店は今日からバリスタを新たに加えた3人体制。

しかし、問題はまだまだ山積み。

まずは、彼女と彼のすれ違い。

それを何とかしなくては。

微妙な距離感が見え隠れする、おかしなお店がここにある。

cafe selectは、本日も営業中でございます。

~~~~~

(閉店)

「つまり、あさみはあなたをライバルとみなし、正々堂々と勝負がしたいというわけです」

「ライバルって……。一方的に？」

「はい。そこは大目に見てあげてください。彼女は極度の恥ずかしがりやなので」

「まあ、そつらしいわね」

「ですので、ひとつだけ勝負の条件をつけてもよろしいですか？」

「聞いてから決めるわ」

「そうですね。では……」

「ちびびっ…」

「自分から、香坂優一に告白してはならない」

「はい？」

「つまり、彼から告白されるように、いえ、彼から好意を抱かれた方の勝ちということですよ」

「……あのね」

「はい」

「恋愛って別に勝負事じゃないと思うの。わたしは彼のことが好きなんだし、告白したら駄目なんて拷問ものよ？」

「それは分かっております。ですから無料とは言いません。その条件を飲んでくれる代わりに、こちらもひとつあなたの願いを叶えます」

「ふん。どういふこと？」

「当店c a f e s e l e c tをご存知で？」

「ええ。未来が視えるとかいう」

「はい。今回はあなたの知りたい未来がどの程度のものであっても、

報酬ゼロで見て差し上げます」

「なるほどね。……無料で未来を視てくれる代わりに、そっちの要求も飲めってこと？」

「そういうことです」

「ふうん、分かったわ。それじゃあ、お願いしようかしら」

「では、契約成立ということによろしいですか」

「そうね」

「ありがとうございます」

「いいわよ、別に。だって……」

「だって？」

「わたしが視てもらうのは」

了

ケース1 『僕は彼女に告白すべきか、否か(その4)』 (後書き)

さて、ここまでが1話分です。

次回更新はいつになるか分かりませんが、気長にお待ちください。

それでは、ここまでお読みいただきましてどうもありがとうございます。
ました。

ケース2 『私は辞退すべきか、否か(その1)』

(開店)

「どうしよう……」

悩める少女はひとり、部室に残ってうずくまる。

ある程度の覚悟はあった。しかし、いざとなるとやはりどうして
良いか……。

贅沢な悩みなんだろうことは分かっている。分かっているが。

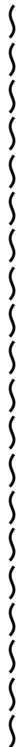
少女は何度目か分からないため息をつく、部室から出てとほと
ほと歩き出す。

部室を出て、校門を通ろうというとき、ぼろぼろの紙が転がって
いるのに気づいた。

それは風に舞い、宙に浮き、書かれた文字が少女の目に飛び込ん
だ。

c a f e s e l e c t

どうやら同好会の勧誘紙らしいそれを見て、少女はぴたりと、そ
の歩を止めた。



差手高校。ここには一風変わった同好会がある。その同好会に与えられた教室は、どこからどう見ても喫茶店にしか見えないように改装されている。

なぜこの差手高校にそんな場所があるのか、という話だが、それにはとある事情がある。この喫茶店、名を「cafe select」と言った。元々はただのお茶飲み同好会だったのだが、1人の女子生徒の存在により、同好会でありながらこのような待遇を受けることになった。

その女子生徒の名前は二ツ橋彩咲未。通常人にはありえない特殊な能力、それはすなわち未来を予知する能力であるのだが、それを持つ彼女が理事長の目に留まり、めでたくこうした喫茶店を手に入れることができたのだ。

結果的にいろいろあつて、同好会のメンバーはたった2人にまで減ったのだが、先日の小さな事件により、新たなメンバーを加えることができた。

新体制の整ったcafe selectは本日も通常営業中。この同好会の目的は、彩咲未が未来を予知することにより、お客にベターな選択をしてもらいたいという、いわばお悩み相談室のようなことである。ただ、この彩咲未という人物がかなりの変わり者であるという噂が一人歩きし、ここに近づくものは少ない。新たに加わったメンバーがコーヒを淹れる技術を有していることから、たまにコーヒを飲みにやってくる生徒もいるのだが、それも同好会メンバーの顔見知りがほとんどである。よって、校内にあるとても異質な場所であるにも関わらず、この同好会は知る人ぞ知る存在になっているのである。

「ひまあ……」

ソファでごろごろしながら、うー、とか、あー、とか言っているのは二ツ橋彩咲未。cafe selectの店長である。

「香坂がないからと言って、だらけすぎるのも良くないかと」

彩咲末に小言を言うのはcafe selectのウエイトレス。副田愛花。きちんとした身なりに、きびきびとした動作。彼女らが同じ年とは到底思えない。

「……だって」

「だって？」

「……香坂君がいると緊張しちゃうんだもん」

「だからと言って、それが今だらける理由にはなりません」

「う〜……」

ソファでひっくり返り、彩咲末の髪がばさばさと広がる。危うく床につきそうになるが、どうやら床までは届かない程度の長さらしい。確かに、このだらしなさは想い人に見られたくないものかもしれない。

2人の会話に出てきた香坂という人物。彼がもうひとりのメンバー、cafe selectのバリスタ、香坂優一である。彼の家は喫茶KOSAKAという喫茶店をやっている。彩咲末は彼に絶賛片想い中で、先日の事件でいろいろあって勘違いを生んだまま、彼に感謝されているという状態である。その事件の後、さらにひと悶着あったのだが、それについてはまた言及するときもあるかもしれない。

さて、そんな3人が運営するcafe selectであるが、普段はこのようにだらける彩咲末と彼女とは真逆にきっちりと働く愛花。それから、実家の方が忙しくないときという条件付で、優一がやって来るといふ状況である。

そして今、優一の姿はここにはない。よって、想い人のいない間、彩咲末は思う存分にだらけるのである。優一のいないところでまで気を張っていると、精神的にもたないのだろう。

コンコン。

だらけきっている彩咲末はノックの音に反射的に身を起こした。

と言っても、そのノックの主が優一である可能性はかなり低い。もはや cafe select のメンバーとなった優一がノックをする理由がないからだ。まあ、ノックをしてもおかしくない人柄ではあるのだが。

さすがにお客の前でだらけきった姿を見せるのもあれなので、彩咲未がただちに“優等生らしく”姿勢を正したのは評価すべきところだろう。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは、ひとりの女子生徒だった。彩咲未も愛花も見ることがない顔であり、彼女らはそのあどけない容姿から年下であるうと推測した。

「好きな席にどうぞ」

「は、はい」

愛花は言いながら調理場へと足を進める。当店自慢のバリスタがない今、コーヒーを淹れる役目は彼女に一任されている。あるいは缶コーヒーを出すという手もあるのだが。

「……え、えっと」

愛花がコーヒーを準備している間、彩咲未がお客の対応をする。

俯き加減で呟いているようにしか聞こえない彼女の声は、無事にお客の耳に届いただろうか。

「あの、私、風早明帆かほはやあきほって言います。1年C組です」

「え？ あ、はい……。えっと、二ツ橋、彩咲未です」

「あ、あなたが……。!?」

「うつつ」

引っ込み思案で大人しい彩咲未は普段は物静かでいっさい目立たない。しかし、コーヒー摂取時の彩咲未は違う。未来を視る能力に加えて、その破天荒っぷりが噂を呼び、彼女の知名度は校外へと広がっているくらいだ。だから、こうして顔も知らない後輩にもその名前は知られているというわけだ。

興味津々でじつと見つめられた彩咲未は恥ずかしさのあまり、声もなくあわあわと視線を走らせる。助けを求めるように愛花を見て、それから瞳に涙をためた。

「あ、それですね。ご相談したいことがありまして」

「……うう、うん」

彩咲未の曖昧な返事を余所に、明帆は相談内容を語り始める。

「実は私、陸上部に入っているんですけど、この度、大会のメンバーに選ばれたんです。でも、1年生がメンバーに選ばれるのって、ちよつと……っていうところがあつて。その、ある先輩を押しつけて自分がメンバーに入っちゃったんです。その先輩はもう3年生で、これが最後の大会なんですけど、タイムは圧倒的に私の方が良いんです。だから学校側の事情を考えれば、私が出るべきなんだと思うんですけど、私はまだ来年、再来年とありますし、今回は辞退すべきなのかなあ、と思ひまして……」

「ん……んん？」

「つまり、大会の出場権を先輩に譲るべきなのかどうか、ということですね。さらに言えば、譲ることで逆に先輩を傷つける結果にならないかというところまで考えている……。違います？」

「あ、いえ……。そう、です。できるだけ、先輩には嫌われたくないですし。どうするのが最善なのかが分からなくて……」

コーヒーを運んできた愛花が明帆の対応を交代する。蚊帳の外に押し出された彩咲未はコーヒーを一口すすって、まずは舌打ち。

「めんどくさいことであじうじ悩んでんじゃねえよ。勝負の世界なんだから、速い奴が出りゃ良いんだよ」

ぼかんと口を開けたのは至極全うな反応だっただろう。明帆はその変貌振りに夢でも見ているのかといった顔つきで、何度も目をこ

すった。それから不躰にも彼女を指差し、愛花にすがるような瞳を向けた。

「ご安心ください。これは現実です」

「は、はあ……」

「指差すなよ」

「あ、ごめんなさい」

彩咲未にひと睨みされた明帆は、愛花に出されたコーヒークップを手に持ったまま少しの間固まった。

「まあ、客は客だから見るけどな。要はあれだろ。辞退した場合と、辞退しなかった場合。どっちがその先輩から恨まれずに済むかってことだな」

「できれば恨まれたくは無いですけど」

「ああ？ ……言い方がまずかったか。じゃあ、どっちにすれば先輩に嫌われずに済むかってことだな」

「あ、そうです」

「よしよし。じゃあ、任せろ」

そう言って、彩咲未は瞳を閉じた。別に変わったことをする必要は無い。こうしてただ瞳を閉じれば、彼女の瞼の裏に未来が見えるのだ。明帆が出場権を放棄して先輩に譲った場合、そして、出場権を放棄せず大会に出た場合……。

それぞれの選択をした場合の未来が彩咲未の瞼に映る。
「なるほど」

一通り視終えた彩咲未は片目を開けて明帆をその視界に捕らえた。それからにやりと笑う。

「面白い展開だな」

「え、ええ？」

彩咲未はにやにやとした顔つきで、ぐいっと明帆の顔に近づいた。そして、視た未来の内容を告げる。

「いいか。まず、お前が先輩に譲った場合だ。その場合、お前はその先輩を含めて他の先輩からも一目置かれることになる。先輩を思

つて譲るなんて、とても良い後輩だったことだな。だが、お前の代わりに出場することになった先輩は、大会前日、最後の調整で怪我をする。結果、先輩は最後の大会には出場できず、しかも怪我を負うという結末を迎える」

「……じゃ、じゃあ」

「では、次に、お前が譲らなかつた場合だ」

明帆の介入を許さず、彩咲未は続ける。

「その場合、先輩から特にお咎めを受ける事はない。他の先輩も実力主義には納得しているから、別段お前に対して悪い印象を抱くことはない。だが、今度はお前が怪我をする。しかも大会当日にだ。選手交代をする時間もなく、お前は棄権。もちろん先輩も出られない」

そこまで語って、彩咲未はふうと息をはくと明帆から顔を話して、ぞんざいに椅子に座り込んだ。

「さらに言おう。後者の場合、先輩は最後の大会に出られないことで、ひとり泣くことにもなる。それはここであたしが言わなければ誰にも知られないままだったことだが、先輩は悔しくて泣く。別にお前を恨んでいるわけじゃない。自分の力の無さに嘆くことになる。ひとり、淋しく、泣く」

全てを言い切った顔で彩咲未は小さく微笑むと、最後の締めめに、

「どちらを選んでもハッピーではないな」

と言った。そして、タイミング良く、コーヒーの効力が切れる。

「だ、だから……えっと、どっちが良いかっていうか、えーっと、その……」

「時間切れのようです」

「……………」

彩咲未が元に戻ったことを確認した愛花は事務的にそう告げるが、明帆は思案顔で硬直したままである。

「お力になれたでしょうか」

「……え？ あ、はい」

愛花の言葉に反射的に頷いた明帆は、そそくさと立ち上がるとお礼の言葉と共に頭を下げて出て行った。

残された2人は彼女の後姿を見送ることしかできない。残された2人は。

「おっと」

cafe selectを出た明帆は、彩咲未に言われたことを考えながら歩いていたら、前方からくる人影に気づけなかった。

「あ、ごめんなさい」

「いや、別に良いんだけど……」

明帆にぶつかられた男子生徒は彼女が出てきた場所を見て、それから再び彼女に視線を落とすとした。

「うちに何か用事だったの？」

「え？」

「あ、僕は香坂優一。一応、その同好会のメンバーだから」

「そうですか……」

優一は人の良い笑顔を浮かべるが、一方の明帆は複雑な表情のまま。

「えっと。もしかして、悩み事がうまく解決しなかったとか？」

「……え、ええ。そんなことは」

「そっか」

明らかに落ち込んでいるように見える目の前の少女に対して、優一は困ったように頬をかくとひとつの提案をした。

「えーっと、ちなみにどんな悩みなのかな。僕でよければ力になれ

るかもしれないけど……」

「……え？」

「いや、無理にとは言わないんだけど。うちは“悩みを解決する”のが目的なわけだから、そんな顔をされたまま、はい、さようなら、っていうわけには……ね」

「……」

そんな優一の様子を見て、明帆は悩みを話してみても問題ないと判断したのか、小さく息をはいた後、事情を説明し始めたのだった。

ケース2 『私は辞退すべきか、否か(その2)』

「……と、いうことなんですけど」

「なるほど、ね」

話を聞き終えた優一は顎に手を当てて難しそうな顔つきになる。

確かにどちらを選んでもベターとは言いがたい。特に先輩が人知れず泣く、というのはなかなかきつい。きついが……。

「君は、どうしたいの？」

「え？」

いきなりの問いかけに明帆は戸惑った。どうしたい、とはどういうことだろう。

「つまり、君は大会に出たいのか、出たくないのか、ってことだね」

「私は……」

その選択肢を提示させられて、明帆は迷う。これまでの選択肢は、辞退すべきか否か、だった。しかし、彼が問うたのはそれとは違う。自分は大会に出たいのか否か。

…… ippたい、何を迷うことがあるのか。自分は何のために苦しい練習に耐えてきたのか。メンバーに選ばれたときに生まれた喜びは、決して偽物ではない。

「私は…… 出たいです」

その答えに、優一は満足そうに笑う。そして、彼女の肩をぼんと叩くと力強く言い切った。

「よし、分かった。後は僕に任せて」

「…… ええ？」

「君は何も気にせず、いつもどおり練習して本番を迎えてくれれば良いよ。大丈夫。何の問題もないから。きっと、全部うまくいくよ」

「で、でも」

「もしも」

急にそんなことを言われて戸惑う明帆を余所に優一が言う。その圧倒的な自信にはどんな裏づけがあるのだろうか。

「もしも、君の“満足のいく結果”にならなかつたら、今回の件の報酬はいらぬし、さらに、何か1つ君の言うことを何でも聞くと約束しよう。……それで、どうかな？」

「わ、分かりました……」

気圧された形で明帆が頷く。優一はそれを見て満足げに笑うと、彼女の横を過ぎて *cafe select* の扉の前に立った。

「良い“結果”が出るように、練習がんばってね」

「あ、はい」

明帆は律儀にも頭を下げると、グラウンドに向かって駆けていった。優一は扉に手をかけた姿勢のまま、ぽつりと呟く。いつも緩く笑みを浮かべている彼にしては、いやに真面目な顔つきだった。

「……彼女が、風早さん、か」

~~~~~

「遅れました」

「今日は欠席かと思っていました」

「いや、ちよつと。掃除当番が長引いて……」

「あ、そうでしたか」

「えーつと、二ツ橋さんは？」

「あそこです」

相変わらず優一と同じ空間にいることに慣れないのか隅っこに隠れている彩咲未を指差して、愛花は調理場へ向かった。優一にコー

ヒ―でも淹れようと思ったのだ。

「二ツ橋、さん」

「は、はい。なんででしょう」

「あの、さっきお客さんが来ていたと思うんだけど」

「はい。き、来ていました」

「それで、具体的な内容を教えてくれないかな。特に、彼女が大会に出た場合の未来の方を」

優一の提案に、きよんとした顔をした彩咲未は視線を愛花へと移す。愛花も怪訝な顔をしながら、優一の分に加えて彩咲未の分のコーヒーを淹れる。

「どういうことですか？」

「要は、お客さんにベターな未来をあげようというわけかな？」

愛花に手渡されたコーヒーを一口すすって優一は笑う。彩咲未も、おずおずと隅から出てくると、コーヒーを飲み、事の詳細を話し始めたのだった。

~~~~~

「って感じだな。……ただ、まあ優一は新人だから知らないかもしれないが、うちはあくまで未来を予知するところまでが仕事なんだ。いちいち個人的にサポートする必要ってのはないんだぜ？」

「……じゃあ、今日からはそれを変えよう。二ツ橋さんたちは予知をする。そして、僕はその後のサポートをする。それで、どう？」

「どうって……なあ？」

彩咲未は首だけを愛花に向ける。愛花は別にどちらでも良いです、という顔で少しだけ首をかしげた。

「どつちにしても、今回の件は何とかするって約束しちゃったし、二ツ橋さんたちが動かないなら、僕が動くだけだよ」

「……その言い方は、なんていうか、悪意が込められているな」

彩咲未はため息をつくつと、頭をかいた。女の子らしさのかけらもない行動に、愛花がちよつとだけ顔をゆがめた。

「とりあえず、1つ確認したいんだけど」

「なんだ？」

「風早さんが怪我をするって言ってたけど、どういう状況でそうなの？」

「ああ。それは、単に腱を痛めるってところだな。張り切って練習したせいで、疲れが溜まっていったって感じか？ あたしは運動のこととは良くわからないんだが、そういうのってあるんだろ？」

「なるほどね。ありがとう」

優一はポケットから携帯電話を取り出すと、なにやらかちかちと打ち始めた。気になった彩咲未がそれをすつと覗き込む。

「何やってんだ？」

「え？ ちよつと、ね」

「ちよつと、つてお前。話の途中に携帯なんて触られちゃ、こつちも気分が悪いだろ？」

「あ、そつか。ごめん」

彩咲未の指摘に謝る優一の間をついて、彼女は彼の手から携帯電話を奪い去つた。そして、確認する。

「ふ、二ツ橋さんっ！」

「ああ？」

確認したのは送信者の名前。そこに書かれた名前を見て、彩咲未の機嫌がみるみるうちに悪くなる。

「返してもらえると、嬉しいかな、つて」

急に機嫌の悪くなった彩咲未を見て、すっかり弱腰の優一だが、彩咲未の背後から近づいてきた愛花によって無事、携帯の奪取に成功する。

「何をやっているんですか、あなたは」

「返せよ、愛花」

「これは元々、香坂の携帯です」

「うっさいんだよ、だいたい」

ぴたりと時が止まる。愛花の手から携帯を取り返そうと暴れていた彩咲末の動きが止まり、ぎぎぎ、という擬音が聞こえそうなくらいゆっくりとそして不恰好に彼女の首が優一のいる方向へと回る。

「……」

「」

彩咲末の顔は瞬く間に赤くなり、さらに涙目になって、大声を張り上げた。

「ごめんなさい!!」

どうやら元に戻ったらしかった。呆れ顔の愛花から携帯を返された優一は、とりあえずメールの続きを作成し、それからソファに顔を埋めてじたばたしている彩咲末に向かって口を開く。

「あの、別に気にしてませんから、そんなに……」

「きゃああああ!」

「……二ツ橋さん?」

「放っておいてあげてください」

愛花はつかつかと彩咲末に近づくと、彼女の頭を一発はたいた。小気味良い音がして、彩咲末の動きが止まる。その一連の流れに優一は苦笑いを浮べるしかなかった。

またひとつ、二人の関係を如実に示す光景を目撃した優一だった。

ケース2 『私は辞退すべきか、否か(その3)』

「……それで？ 頼みたいことって何？」

その夜、近所の公園で2つの人影が言葉を交わしていた。家がご近所さんであるこの2人は昔、この公園でよく遊んだものだった。高校生にもなると、さすがに公園で遊ぶということはない。彼らは久しぶりに足を踏み入れた公園でベンチに腰掛け会話を進めた。

「例の1年生のホープのことなんだけど」

「え？ 明帆のこと？」

「そう」

「……ふん」

1人の声が若干不機嫌そうなものになったように思えたのは、きつと気のせいではない。

「で？」

「確か、その風早さんって子、100mの選手に選ばれたよね？」

「うん。そうだけど」

「それで、3年生の先輩が落選した」

「……」

窺うような視線を向けられ、優一は言葉に詰まった。無言の重圧は、厳しい言葉よりも重い。横に座る望々乃からの視線に彼は戸惑いを隠せなかった。

「確かに先輩は選ばれなかったけど、それは仕方ないのよ。陸上って結構シビアなの。実力がタイムっていう数字ではつきり出るから100分の1秒だって、負けは負けなのよ。先輩は勝てなかった。それだけのこと」

「……それは、分かってるんだけど」

「だけど？」

「風早さんは、それで悩んでいるらしくて」

「でも、明帆は今日もちゃんと練習に来たわよ」

「あ、それは僕が言ったからで」

「……もつと詳しく話してみて」

望々乃に促され、優一は事の顛末を話した。明帆は大会には出た
いこと。しかし、彼女が大会に出ると、先輩がひとり涙を流すこと。
さらに、明帆は大会当日に怪我をし、結局大会に出場できないこと、
などを。

「二ツ橋彩咲未の予知は、そう言ったってことね」

「うん」

話を聞き終えた望々乃は、脳裏にあのおどした少女のことを
思い浮かべた。先日の“優一かつさらい事件”の後、愛花との密約
により、未来を視てもらったことがある。そのときに彩咲未に対し
て抱いた第一印象は、ありえないくらいに挙動不審、だった。その
後、ありえないくらい敵意を向けてくる、に変わったのだが。そし
て、その時の“予知”を思い出す。

確か、自分は未来を視てもらって？

「それで、具体的に私に何を頼みたいわけ？」

「あ、それなただけど、どうやら風早さんの怪我の原因っていうの
は、練習のしすぎによる疲労の蓄積が問題なんじゃないかって言う
ことなんだよね」

「うん」

「だから、僕から提案なんだけど、さ」

少し自信なさげな、けれど、望々乃ならきつと上手くやってくれ
るだろうという信頼を込めて、優一は言葉を続ける。

「まず、望々乃が先輩にフォローを入れてほしい」

「うん？」

「つまり、先輩が涙を流さないように、上手くフォローして欲しい。
できれば、自発的に風早さんのサポートに回ってくるようなフォロ
ーができれば尚良い」

「難しいこと言うわね」

「……ごめん。それから、もうひとつ」

「うん」

「先輩が風早さんをサポートしてくれるのに越したことはないんだけど、望々乃も風早さんをよく見ていて欲しい。彼女が怪我をしないように、ね」

「私だつてマネージャーなわけだから、部員の状態くらいちゃんとチェックしているわよ」

「いつもにも増して、だよ」

「うん……」

優一の提案に望々乃は唸る。彼の狙いは分かる。つまり、先輩も明帆も、誰もがこれで良かったと思える未来に導くための手助けをしてくれ、ということだ。陸上部のマネージャーをやっている望々乃からすれば、先輩、後輩関係なく、それなりに信頼もあるし、話をすれば聞いてくれる可能性は高い。しかし、下手をすれば先輩の傷にさらなる痛みを加えるだけだ。

「自信、ないよ」

「大丈夫だよ」

「大丈夫つて、あんたは何もしないから良いけどさ」

「望々乃なら大丈夫だよ」

そう断言されて嫌だと言つことはできない。しかも、頼み人は自分の想い人だ。望々乃は了承の返事をしようと口を開きかけたところで、ふと動きを止めた。

あ の とき、 自 分 は 未 来 を 視 て も ら っ て ？

望々乃は、思わず声を漏らして笑った。なるほど、と思ったのだ。確かに彩咲未には予知の力があるのかもしれない。

彼女は了承の返事の前に、1つ、とある交渉を持ちかけた。

「じゃあさ、私がそれをやる代わりに優一も何か頼まれてくれない

「？」

「え？ もちろん、良いけど」

「……大会が無事終わった次の週末」

「うん」

「私とデートしよ」

愛花との契約にデートに誘ってはならないという約束はなかった。しかも、今回は優一の頼みを聞く代償だ。何を躊躇う必要がある。望々乃はこうして優一とのデートを取り付け、彩咲未の予知した未来が着実に過去になっていくのを感じていた。

~~~~~

「……嫌な予感がする」

そう独り言ちたのは彩咲未であった。自分の部屋でコーヒーを飲みながら勉強する。勉強のような地道な作業は元の彩咲未の方が効率が良いのだが、今日に限って、どうしてもコーヒーが飲みたくなつたので、この姿で勉強をしている。

そして、ふと嫌な予感が頭をかすめた。虫の知らせとでも言うのだろうか。はたまた、これもコーヒーマグによる不思議な能力の副作用なのか。

彩咲未は、その嫌な予感を無理やりしまいこむと、シャーペンを握る手に力を込めた。



バキッ。

「もろいんだよ、ちくしょー」

~~~~~

望々乃の行動が功を奏したのか、とにかく大会当日までは何の問題もなく過ごすことができた。先輩も明帆のサポートに徹しているし、全てはうまく回っているようだ。

予知は100%ではない。こつそりと大会の様子を伺いにきていたcafe selectの面々は最終調整を行う明帆を観察しながら、そんないつか優一が言った言葉を思い出していた。

「どつやら問題ないようですね」

「そうだね」

「……………」

上から、愛花、優一、彩咲未である。無事に最終調整を終えた明帆は先輩と共に召集場へと歩いていく。この分なら何事もなく大会を終えることができそうだ。

「そんなに心配することなかったかな」

「当然よ」

「おおっ！？ いつからそこに!?!」

3人がこつそりと隠れていた場所に突然もう1人が加わった。その人は見覚えのある体操服姿であった。陸上部のマナージャー、君野望々乃である。

「先輩に何て言ったんだ?」

「ん〜？ そうねえ。別に変わったことを言っただつもりはないんだけど。メンバーに選ばれた人を応援するのは当然だし、明帆が良い成績を収めることが陸上部の、もっと言えば学校のためになる、みたいなの、とーっても青臭いことを言っただけよ」

「それで、納得してもらえたのか？」

「さあ？ あの様子を見ると、そうなんじゃないの。元々、先輩はとてよよくできた人だしね」

「……そうか」

望々乃はちらりと優一の後ろにいる愛花……の後ろにいる彩咲未に視線を向けた。蛇に睨まれた蛙のように小さく震える彼女を見て鼻を鳴らすと、すぐさま優一に視線を戻した。

「じゃあ、こっちは上手くやったわけだから、約束の方もよろしくね」

「え……？ あ、ああ」

「ふふ。それじゃ、私は仕事があるから」

「うん、またな」

手を振って去っていく望々乃を見送った後すぐ、愛花が優一の肩に手を置いた。口は開かずとも目が語っていた。約束とは何？ と。

「……えーっと、風早さんのレースがもうすぐ始まるかなあ」

逃げ出すように駆けていく優一を素直に見送って、愛花は後ろに隠れる彩咲未に声をかけた。

「完全に彼女のペースですね」

「ふえ？」

「はあ……。もっとしつかりしてください」

こうして、彩咲未の予知は外れ、滞りなく大会は終盤を迎えた。

~~~~~

予選、準決勝と勝ち進んだ明帆は決勝前のウォーミングアップを行っていた。1年生で決勝の舞台。自然と鼓動が高鳴る。……緊張というやつだ。いや、もしかすると期待、という方が正しかったのかもしれない。

また、先輩も自分を追い抜いて大会に出場した後輩が、こうして決勝の舞台に上がったことに心から嬉しいと感じていた。だからこそ、彼女は決勝前に可愛い後輩のためを思って、調整に付き合った。そうして、ほぼ万全の状態で風早明帆は決勝の舞台に立ったのだ。

スタートラインに立った明帆は脇で声援を送ってくれる先輩を見た。それから、その傍で小さく手を振るマネージャーを見た。彼女が裏で模索してくれていたのはよく知っている。心の中で感謝し、最後に彼を見た。ばれていないつもりかもしれないが、例の同好会のメンバーが、こっそりとこちらの様子をうかがっている。どうやら彼の言うとおり、大丈夫だったらしい。

ならば、彼らのしてくれたことに対する恩返しとして何ができるだろう。……このレースに勝つ。それが、彼女の頭に浮かんだ答えだった。

位置について、の声で膝をつく。この一連の流れはさすがらしい。100m先を見据えて明帆は思う。レースが始まれば、ゴールまではほんの一瞬。わずか10秒とちよつと。しかし、ここに立っている者たちは、すべからくその一瞬のために、何ヶ月も、あるいは何年も練習を積み重ねてきた者たちなのだ。だから、勝てるとは思わない。でも、勝ちたいと思う。

よいい、の声。ここでこの場と世界が遮断される。100mのコースと、選ばれた者たちの人数分だけのレーン。この場が、世界が

ら離れる。声援は送られているはずだ。けれど、そんなものは聞こえない。そうしてさらに、世界は狭まる。徐々に隣にいる人の気配を微塵も感じなくなる。ここにあるのは、自分と一本の100mライン。今はただ、その小さな世界を駆け抜けるだけだ。

ピストルの音で走り出す。すると、世界が蘇る。声援が耳を打ち、視線はゴールよりも遠くを見据える。ああ。もう終わってしまう。終わってしまう。この心地よい緊張感。そして、底知れぬ幸福感。

……自分は、この感覚を先輩から奪ってしまったのだ。

ケース2 『私は辞退すべきか、否か(その4)』

「お疲れ様」

ふたを開けてみれば順位は最下位だった。周りがほぼ3年生なのだから仕方がないといえば仕方がない。けれど、悔しい。

「……先輩」

「何？」

「……」

「お疲れ様」

ただただ静かに涙を零す明帆を見て、なにかを思った優一はもらい泣きをする彩咲未と彼女を慰める愛花を余所にひとりその場から姿を消したのだった。

「先輩」

「……何？」

落ち着いた明帆はクールダウンに向かい、残された先輩は望々乃から声をかけられた。

「お疲れ様でした」

「何、が？」

「……その涙は」

「言わないで」

先輩は言つて涙を拭くと、にこりと笑った。明帆の前では毅然と振舞っていた彼女だが、やはり“悔しい”という気持ちは消せなかつたらしい。

「終わっちゃったなあ、と思つてね」

「そうですね」

「うん。我慢できなかったよ」

「先輩……」

「秘密ね」

「もちろんです」

果たして、誰にも知られるはずのなかった先輩の涙は望々乃の知るところになった。そして、さらにもうひとり。

~~~~~

週明け。缶コーヒーをパックで購入してきた明帆がcafes
electの扉をノックしようとしたときだった。彼女の腕を何者
かが遮る。

「え？」

「ちよつと、良いかな？」

「あ、はい」

彼女が床に置いておいたコーヒーのパックを抱えると、優一はす
たすたと歩き出した。明帆は慌ててそれを追いかけていく。

着いた場所は、あまり人気のない廊下の隅だった。どうしてこん
なところに、という明帆の疑問は、彼の言葉で別の疑問へとシフト
することになる。

「いくらだった？」

「……え？」

「これ」

「えっと、それを聞いてどうするんですか？」

「払うから」

優一はポケットから財布を取り出して、中から数枚のお札を取り出した。

「え、でも、これは報酬ですから」

明帆の言葉に優一は静かに首を振った。未だに意味の分からない明帆は首をかしげて、怪訝な顔つきになった。

「僕の言ったことを覚えてる？」

「え？」

「僕はその時、こう言ったんだ」

『もしも、君の“満足のいく結果”にならなかつたら、今回の件の報酬はいらぬし、さらに、何か1つ君の言うことを何でも聞くと約束しよう。……それで、どうかな？』

優一は一言一句違わずに言うと、明帆の顔を見て情けなく緩んだ笑顔を浮かべた。

「僕が思うに、あれは君の満足のいく結果じゃなかったかな、と思つて」

不意にそういわれ、明帆は慌てて彼の言葉を否定する。

「そ、そんなことないです。あれは、私にとって！」

「満足いく結果なら、あんな涙は流さないよ」

「そうじゃなくて、その結果っていうのは、二ツ橋先輩の予知のことです」

「僕はそういう意味で言っていないつもりだけど」

「でも」

「良いから。今回は二ツ橋さんや副田さんの許可を得ずに僕の独断でやったことだから、その責任は僕がとらなくちゃ……。結構難しいもんだね。彼女たちと同じ同好会のメンバーとして働くって言うのは。僕の未来に対する認識の甘さを知ることでもできたし。そのお礼ってことで……ね」

「うう。じゃ、じゃあ、報酬の方だけですよ。お願いの方は別に良

いです。そこまでされるとさすがに……」

「分かった」

半ば無理やりといった形で、優一からお金を受け取った明帆は、それでもまだ納得いかない表情で缶コーヒーを抱える優一を見送った。

視界から消える直前、彼が振り返り口を開いた。

「次は、もっとよい結果が出ると良いね。……お互いに」

「……はい」

優一は明帆が頭を下げる姿を見届けずにその場を立ち去った。そして、すぐに別の声に呼び止められる。

「何あれ」

「何が？」

「下手すれば、口説き文句にもとれるようなセリフがちらほら」

「そんなことないよ」

「うーん。じゃあ言い方を変えるね」

「どうぞ」

「格好つけても、あなたには似合わない」

「……そうかな。でも」

「でも？」

優一はわざとらしく望々乃から視線を外す。その瞳は、どこかここには“存在しない”場所を見つめているかのようだった。

「“約束”をしたから」

「………そうか」

望々乃は淋しそうに目を伏せ、胸に手を置いた。遠い日の記憶が蘇る。約束……。そういわれたら、もはや返す言葉はない。自分が、何か言葉をかけてはいけない。

だからこそ、彼女は無理に笑顔を作って、明るく振舞いながら言った。

「あなたはへらへら笑ってるくらいが丁度良いのよ」

望々乃はそう言って優一の背中を思い切りはたいた。小さくうめ

いた優一は、ちらつと望々乃に視線を飛ばす。

そうして、何かを言いかけて緩い笑顔を作った。

「……………そうかもね」

「うん」

「じゃあ、これ」

「うん？」

優一は缶コーヒーを二本、望々乃に手渡した。

「何？」

「一本は世話になったお礼。もう一本は」

優一は望々乃に背を向けて歩き出す。その続きは言わなくても伝わるということだ。もう一本は先輩の分。自分のせいではないにして、結果的に泣かせてしまったお詫び、である。

「優一っ！」

「何？」

「週末のデート、忘れてないよね？」

「ああ。覚えてるよ」

「よしっ！」

こうして、風早明帆をめぐる陸上部の小さな問題は終焉を迎えたのだった。

~~~~~

陸上部の問題は終わったが、cafe selectでは新たな問題が発生した。

「でえとぉ？」

「うん」

「誰が？ 誰と？」

「うん？ 僕が、望々乃と」

にへらと笑いながら“持参した”缶コーヒーを飲む優一は、その缶コーヒーをありがたく頂戴した彩咲未と顔を突き合わせていた。脇には呆れ顔の愛花がいる。

「何が！？ どうなつて！？ そうなつた！？」

「うん？ 望々乃に先輩をフォローしてもらつように約束しててね。その代わりにデートしようつて」

「ほ、ほほお」

「これつて、どう？ 脈あり？」

「知らねえよ。自分で考えろや」

「そついわずに、女の子からのアドバイスを」

「うるせえ！」

自棄酒、否、自棄珈琲である。彩咲未は2本目のコーヒーに手をつけるそれを力いっぱい振つて勢いよくあける。

「デートつてどこに行けば良いのかな？」

「雑談してる暇あつたら、コーヒーでも1杯淹れるや」

「これだけ缶コーヒーがあるんだから、良いでしょ」

「だあああ！」

すぐさま3本目を飲み干す彩咲未。

「これ全部、飲んだら淹れるよ」

「うん。じゃあ、全部飲むまで僕の話聞いてくれる」

「ああ？ 嫌だよ」

「何で？」

「なんでつて、お前」

二人の会話を聞きながら愛花は思う。いつの間に、この二人はこんなに仲良くなつたんだろう、と。というか、そもそも仲が悪いわけではなかつたっけ。彩咲未が恥ずかしがらずに普通に接していれば香坂の方も“仲の良い友人”としてみてくれるのだろう。“彼のために告白を止めてくれた”人物なのだから。

「ご飯は何を食べれば良いかな？」

「肉だよ、肉」

「肉？ 焼肉とか」

「おお、そうだな。あるいは寿司か」

「寿司？ またジャンルが全然違うものだね。パスタとかそういうのじゃ駄目なの？」

「パスタなんて食った気しねえだろ」

「……まあねえ。じゃあ、行くとしたらどこが良いかな？ 映画とか？」

「あんなもん見て何になるんだよ」

「定番かな、と思って」

「じつとしてるのはきついな。バッティングセンターとかどうだ？」

「なるほど。望々乃は運動神経良いし、それなら良いかも」

「ああ！？」

「何？」

既に6本目の缶コーヒーに手をかけた彩咲未は、まるで酔っ払いであるかのように声をあげた。もしカフェインで酔っ払う人間がいるならば、この世に彼女くらいのもんだろう。

できるだけ、デートが成功しないような方向性にもっていきたいのだが、いかんせん彩咲未にはデートの経験など一切ない。何が良くて、何が悪いのか、いまいちよく分からないのだ。だからとりあえず思いつくまま適当に条件反射のごとく返答する。あまり好みでない話であるにも関わらず、きちんと優一と会話を続けているのは、やはりどこかにある乙女心が影響しているのだろう。

「ああ、もう！ いいから、さっさとコーヒー淹れる。もうねえよ」  
空になった缶コーヒーを振りながら、ややとろりとした目で彩咲未が言う。彼女は本当に酔っ払ってしまったのかもしれない。

「あれ？ いったい何本飲んだの？」

「うっさい。くだらない話をする暇あったら淹れて来いっ！」

さて、そこで愛花がひとつの爆弾を投下する。

「彩咲未は、あなたの淹れたコーヒーがどうしても飲みたいんです。……あなたのコーヒーが大好きですから」  
爆発音は、大きな、とても大きな叫び声だった。

「バカか、お前はあ……！」

~~~~~

(閉店)

「明日はお気に入りの服を着て、あー、早く起きないと髪の毛のセッティングが間に合わないかも……。でもでも、早く寝れるかなあ。優一は今何やってるんだろ。ふふっ。あいつも楽しみにしてくれてくれるかなあ。だったら良いなあ。二ツ橋彩咲未の予知によると、最初のデートは着かす離れずくらいが良いんだっけ？ 一応、あれの予知は当たるみたいだからなあ。でも着かす離れずって難しいよね。手だつてつなぎたいし、うん、せめて腕を組むくらいは……。だいたい幼馴染って結構リスク高いのよねえ……。それから、あの条件かあ。さつきもメールで確認されたくらいだし、やっぱり破つたらひどいんだろうなあ。そういう約束で未来を視てもらったわけだし。……優一、告白してくれないかなあ。待ってるんだけどなあ。ずっと。ずっと。ああ。駄目だ。早く寝ないと。明日起きられなくなっちゃう。待ち合わせ時間に遅れることだけは避けないと。うん、寝よう、寝よう……」

「さて、ここでひとつの問題だ。メールしても良いかな。明日は楽しみだね、とか？ 女々しいかなあ。ここは、別に楽しみじゃないけど、お前が言うから仕方なく、くらいの姿勢でいった方が良いのかもしれないな。たまには引くことも大事らしいし。だいたい望々乃だって、いつものノリでデートしようって言っただけかもしれないし。僕だけが浮かれている可能性もあるんだよなあ。うわあ。緊張してきた。僕だけピエロ状態ってことはないよね。二ツ橋さんの予知によると、僕は振られちゃうんだもん。少なくとも友人以上の想いは抱かれてないってことか。ああ。どうしよう。……こうやって悶々と悩んじゃうから情けないように見えるんだろうな。あの二ツ橋さんみたいに格好良く物が言えればなあ。二ツ橋さんも普段からあんな風なら、もっと話ができて良いのにな。クラスでは大人すぎて逆に変な感じだよ。……おっと、今は二ツ橋さんのことを考えている場合じゃない。明日のことだ。うう。と、とにかく、もう寝よう。待ち合わせ時間に遅れることだけは避けたい。うん、寝よう、寝よう……」

「いよいよ、明日ですか。彩咲未には内緒ですが、明日は尾行させてもらうことにしましょう。強請るネタになるかもしれませんが。それにしても、香坂のあのデレデレっぷり。彩咲未がかわいそうになるくらいです。もういっそ、香坂と君野がくつついて、彩咲未はすっぱり諦めればよいと思うのですが……。しかし、あれでも親友

ですか。ならば、友のために何かをするというのは、ちょっと青春という感じがして良い気がします。はあ……。どちらにせよ、今回のデートも香坂のあのゆるゆるっぷりではたいした進展もないでしょう。ただ例の風早明帆の前では少し凛々しかったように見えたので、明日もあの態度でいかれたら、どうなるか分かりませぬね。……しかし、最近の香坂の浮かれ具合から察するに多分問題ないでしょう。あの凛々しさを引き出すための緊張感が無い気がします。まあ心配しすぎて損はないでしょうし、“何か”が起こる前に止める算段は付けておきますか。……あら、もうこんな時間。早く寝ないといけませんね。待ち合わせ時間に遅れることだけは避けないと。では、寝ましようか……」

「明日か。デートとか何考えてんだ、あのバカは！ だいたい、あの浮かれ具合はなんだっつうんだよ。くそつ。そんなにあの女とのデートが！……………楽しみなのかなあ……………香坂君。いろいろ考えても仕方ないし、今日はもう寝ようかな。あ、そうだ。明日はちよっとつけてみようかな。……………う。ばれたら、お、怒られるかな。怒られるのは、嫌だなあ」

了。

ケース2 『私は辞退すべきか、否か(その4)』 (後書き)

一応、2話はここまで。

なんていうか、ちらほらと伏線をばらまくだけらまいた感じになつてしまいました。ちゃんと回収できるのでしょうか。

できる予定なんですが……。

それにしても男子が出てこないなあと思いましたが、ケース3では男子を。そしてできれば、優一の友人になってくれそうな男子を出したいところです。

では、ここまで読んでいただきましてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6866g/>

コーヒーを一杯。

2010年10月9日23時19分発行